

第 302 回京都市考古資料館文化財講座 / アスニー京都学講座

2019 年 2 月 23 日

連続講座「京都の飛鳥・白鳳寺院」第 2 回

最新の発掘調査が語る、周山廃寺の姿

(公財)京都市埋蔵文化財研究所 イ ウンジン 李 銀眞

はじめに

I . 周山廃寺の立地 (資料 2 - 図 1)

- ・旧丹波国桑田郡の北西部に立地。
- ・山背 - 若狭、亀岡 - 近江方面へ抜ける街道が交差する地点、弓削川と桂川が合流する交通の要衝に立地。
- ・北から南へ延びる丘陵裾部を階段状に削って造成し、要路を見下ろすように伽藍を整えている。
- ・弓削川と桂川の河川沿いに 180 基余りの古墳が密集築造。地方豪族の示威的な建造物としての機能。
⇒交通路および景観を強く意識した選地。

II . 周山廃寺の発掘経緯と石田茂作 (資料 2 - 図 2 ・ 3)

- ①太平洋戦争中に、東京国立博物館収蔵品の疎開のため、京北地域を訪れた石田氏。
終戦後、現在の周山中学校建設工事に先立って、1947・1949 年に緊急発掘 (石田 1959)。
⇒塔跡・中堂跡・東堂跡・西堂跡の存在が確認、北堂跡・南門跡は瓦の散布から位置のみ推定。
- ②塔跡：礎石抜き取り穴と土壇を検出。高さ 94 尺の三重塔と推定。
中堂跡：礎石と抜き取り穴、その下層に古瓦片と灰層を発見、再建の可能性。
東堂跡：間口七間×奥行四間の南北棟の礎石建物。礎石 19 基検出。
西堂跡：東西 7 尺×南北 6 尺の等間隔で礎石 6 基。
人為的に敷設した排水溝と小石敷き、土留遺構 (石階)。
- ③出土遺物：東京国立博物館、周山中学校、京北合同庁舎、京都市埋蔵文化財研究所に分散所蔵。
金属製品 (蔓草麟鳳鏡・葡萄鏡、金銅製風鐸、鉄磬・鉄製風鐸舌)、
瓦類 (「川原寺式」軒瓦、「□田部連君足」銘平瓦)。
- ④造営時期：出土瓦の様式より白鳳期に比定。
廃絶時期：緑釉皿と六器台が東堂跡や塔跡から出土、平安時代初期までは存続していたと想定。

III . 2018 年度発掘調査の成果 (資料 2 - 図 3、資料 3、資料 4 - 図 10)

- ①西堂跡の再検出や規模・性格が判明。
 - ・梁行 2 間×桁行 2 間以上の小型の総柱礎石建物。
 - ・コ字形にめぐる素掘りの排水溝。
 - ・北西側に逆 L 字形にめぐる塀を検出。 ⇒ 経蔵または宝蔵。
- ② 3 つの平坦面と寺域
 - ・平坦面 1 - 地形に直交するように造成 / 平坦面 2 ・ 3 : 建物の方向に合わせて造成
 - ・平坦面 1 ・ 2 の掘形の西辺が一直線 : 寺域の西限
平坦面 2 で検出した逆 L 字形の塀を検出 : 寺域を意識した結果 ?
- ③「北西堂」の存在 : 平坦面 2 から瓦溜り 20 を検出。出土状況から平坦面 1 から流れ落ちたと判断。
平坦面 1 に瓦葺建物が存在した可能性が高くなった。鐘楼か ?
- ④竪穴建物の検出 : 寺域の外側に位置し、一般的な住居跡とは相違する。
高梨遺跡との関連性から、造寺に伴う鍛冶工房跡の可能性。
- ⑤廃絶時期 : 瓦溜 20 から 10 世紀代の灰釉陶器碗出土。平安時代前期にはもう廃絶。
- ⑥ 2 区の瓦溜 128 : 北堂から流れ落ちたもの ? 北堂は瓦葺建物であった可能性もある。
「寺入廿口」銘の墨書土器 (須恵器杯) が出土。
- ⑦土器溜 2 ・ 3 : 江戸時代の土師器皿を多量に検出。周山廃寺の廃絶後、何らかの儀式に使用された可能性。
「郷林寺址」(『北桑田郡誌』1923)

IV . 周山廃寺出土瓦 (資料 4 - 図 11)

- 1) 軒丸瓦・軒平瓦
 - ・軒瓦の組み合わせ
SzM21 + SzH21 ・ 22 / SzM22 ・ 23 + SzH23 ・ 24
 - 2) 丸瓦 : 計 2459 点。 粘土板 > 粘土紐
 - ・ I 類 : 行基式。凸面に格子 > 縄目をナデ消す。
 - ・ II 類 : 玉縁式。計 7 点のみ。
 - 3) 平瓦 : 計 6861 点。 すべて粘土桶巻き作り。粘土板 > 粘土紐
- ① I 類 : 凸面に格子叩き目をもつ。格子叩き目の一辺長さによって I A (小) ・ I B (中) ・ I C (大) に 分類。
布綴じ合わせ目、粘土板合わせ目、分割裁線をもつものが多量に確認。
II 類 : 凸面に縄叩き目をもつ。一辺 5 cm 正方形の中の縄条数によって、II A (粗) ・ II B (密) に分ける。
II A 類は「叩きしめの円弧」をもつ一方、II B 類は側縁にほぼ平行して叩き締められている。
- ② 広端面に叩き目
 - ・凸面の格子叩き目より、細かいものを施す例が多い。
 - ・「補正の叩きしめ」 : 叩き締め調整 → 粘土円筒を桶から外す → 狭端部を上にして乾燥 → 天地返しして広端部を乾燥 → 広端の曲率を正すために、内面に叩き板および当て具を当て、補正の叩きしめ。
- ③ 重複叩き : 格子目 (I A) + 縄目 (II B)、格子目 (I A) + 平行叩き目、縄目 (II A) + 平行叩き目

V . 周山瓦窯跡出土品との比較検討 (資料 4 - 図 12 ・ 13)

- 1) 概要 : 周山廃寺から南西約 1 km 離れた。周山廃寺へ創建瓦・須恵器を生産供給。
 - 2) 周山瓦窯の発掘調査成果 (京都府教育委員会 1979 ・ 京都大学 1982)
 - ・操業順序 : 3 ・ 4 号窯 → 2 号窯 → 1 号窯。
操業時期 : 7 世紀第 4 四半期 ~ 8 世紀第 2 四半期までとされ、 I ~ V 段階に設定されている。
 - ・平瓦 : 正格子 I (OK I) に縄 I (OK II)、正格子 II (OK III)、斜格子 (OK IV)、縄 II (OKV) と型式が増加。
丸瓦 : 3 ・ 4 号窯、2 号窯 - すべて行基葺式 / 1 号窯 - 行基葺式 + 玉縁式
 - 3) 出土遺物からみた伽藍の造営順序
- ① 北西堂の造営時期
2 号窯操業以降 (V 段階) のものが北西堂へ供給。V 段階は平城宮 II (西暦 730 年頃) にあたる。
主要伽藍 (塔・金堂・講堂など) → 付属伽藍 (鐘楼・経蔵など)
- ② 西堂の造営時期
周辺に瓦がほとんど出土していないが、附属建物として、北西堂とほぼ同時期に建立された可能性。

VI . 周山廃寺の伽藍復元

- ① I 地区 : 塔、中堂 (金堂)、東堂 (講堂)、南門
- ② II 地区 : 北堂
- ③ III 地区 : 西堂、北西堂
- ④ 寺域外 : 工房施設

おわりに

【参考文献】

石田茂作・三宅敏之 1959 「丹波国周山廃寺」『考古学雑誌』第 45 巻第 2 号 日本考古学会

京都大学文学部考古学研究室 1982 『丹波周山窯址』

京都府教育委員会 1979 「周山瓦窯跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 (1979)』

杉本宏ほか 1999 「共同研究 北近畿地方の古代寺院の研究」『紀要』第 38 集 龍谷大学仏教文化研究所 pp.145-160

安井良三 1950 「周山廃寺の遺址と遺物」『文化史學』第 1 号 文化史學會

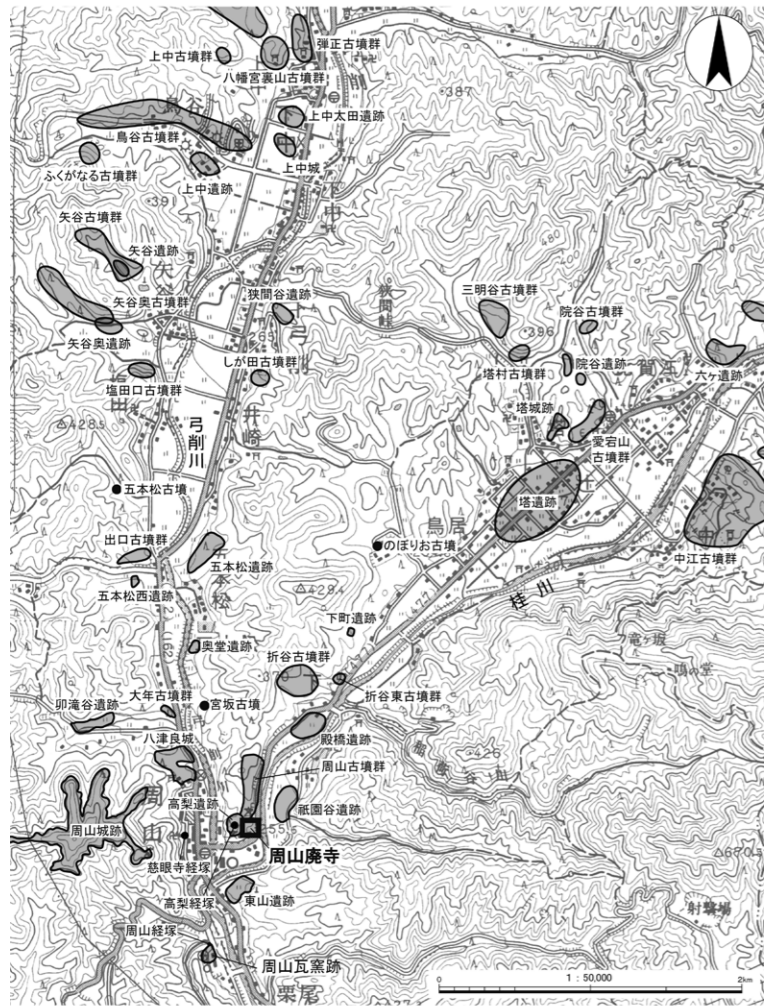
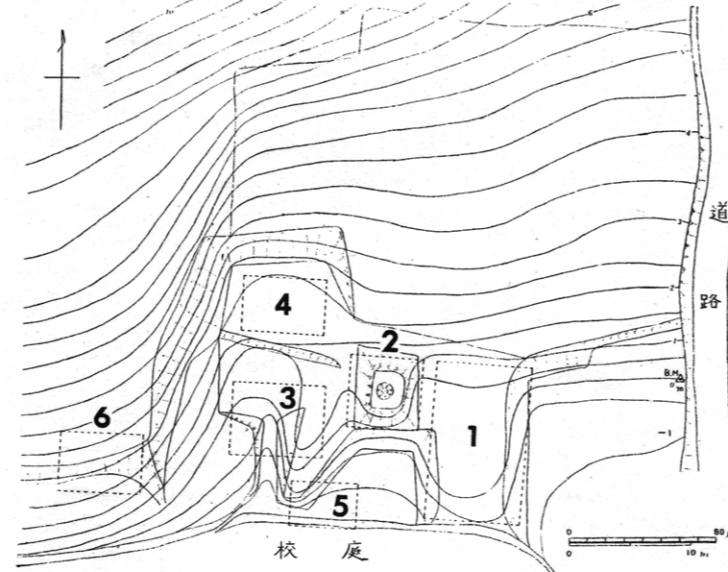
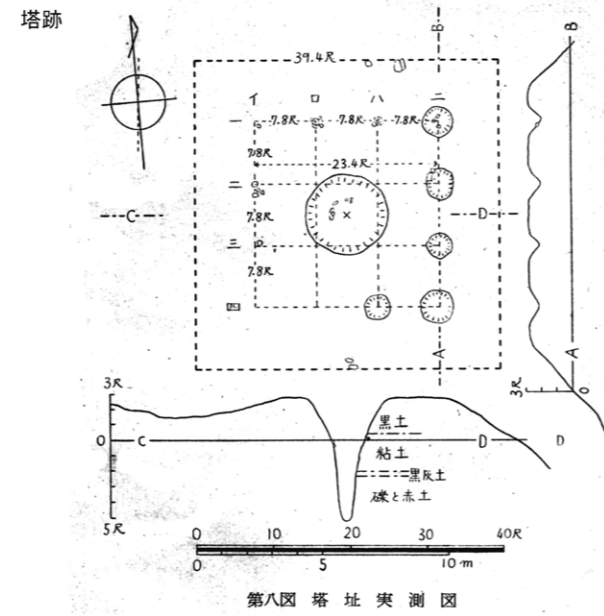


図1. 周山廃寺と周辺遺跡位置図 (1 : 50,000)

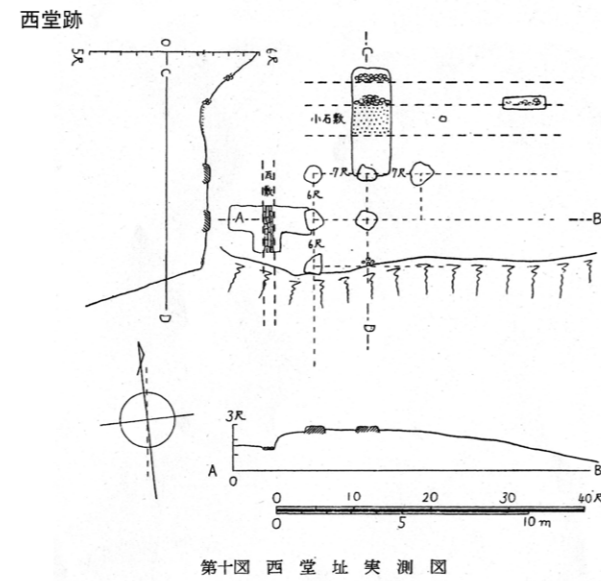
伽藍配置図



第四図 遺址地形図 (1. 東堂址 2. 塔址 3. 中堂塔) (4. 北堂址 5. 南門址 6. 西堂址)



第八図 塔址実測図



第十図 西堂址実測図

※伽藍配置図 S ≈ 1/1,000 塔・西堂・東堂跡 S ≈ 1/300

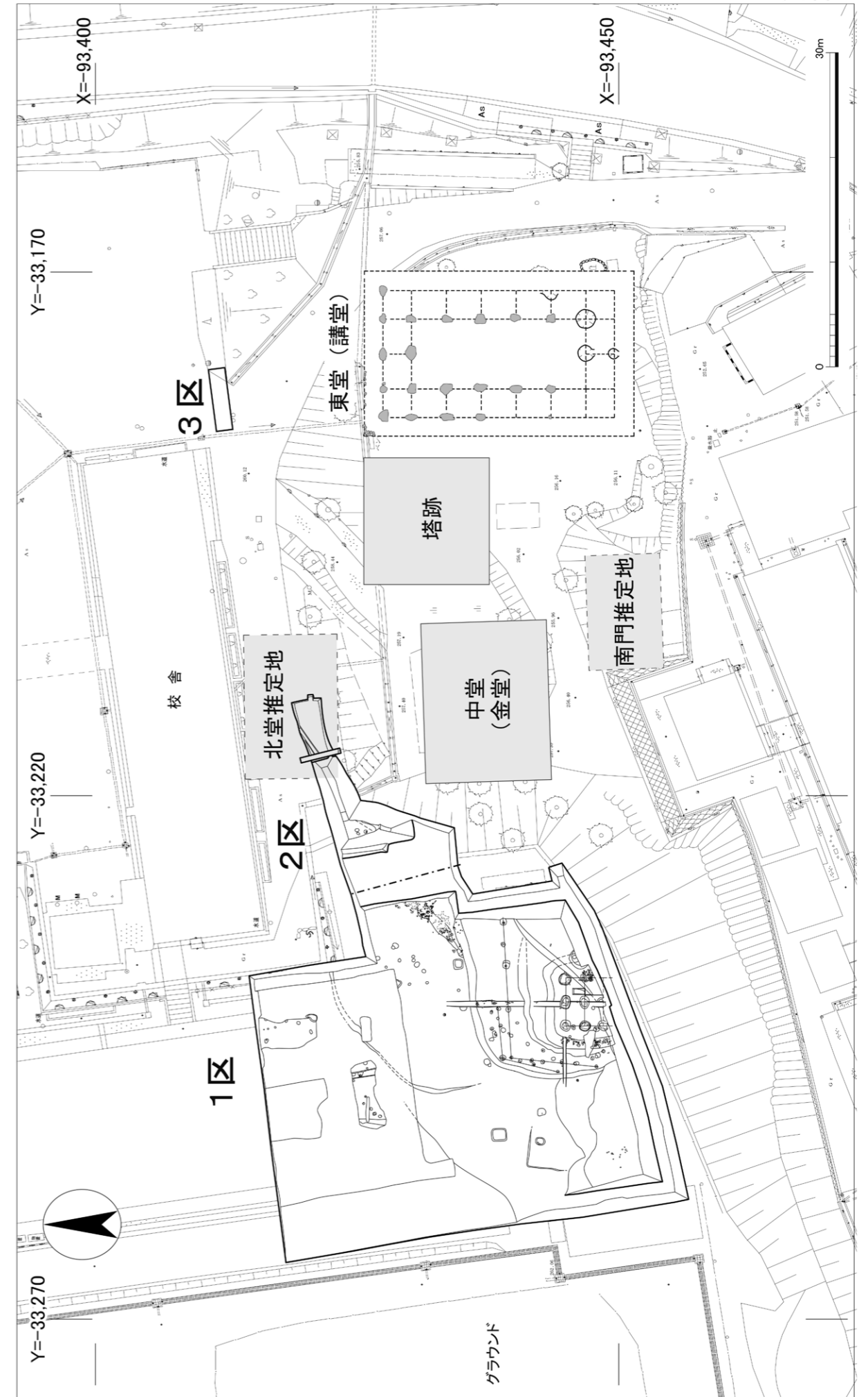
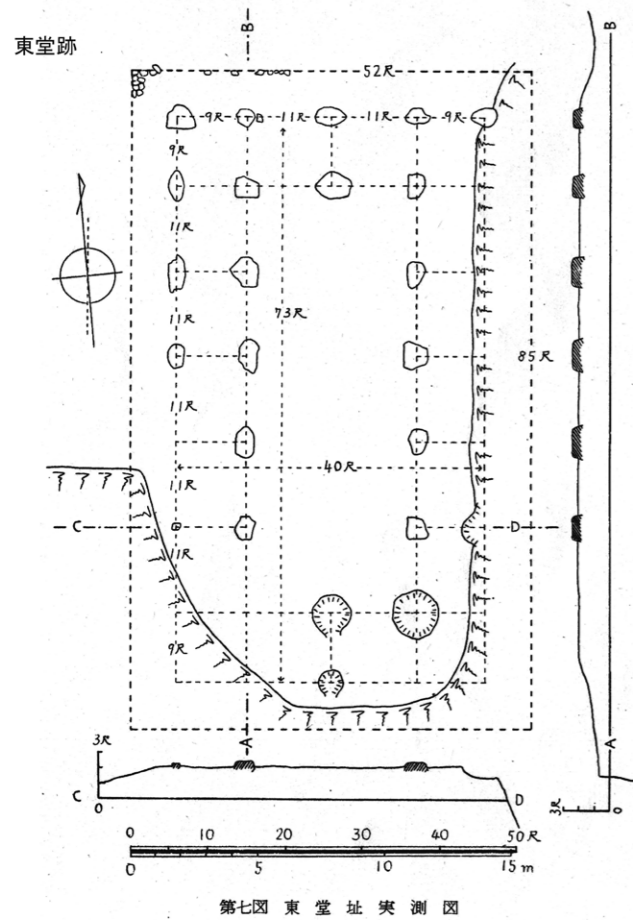


図3. 調査区配置図 (1 : 500)



第七図 東堂址実測図

図2. 1947・1949年発掘調査時の遺構図面 (石田1959より転載)

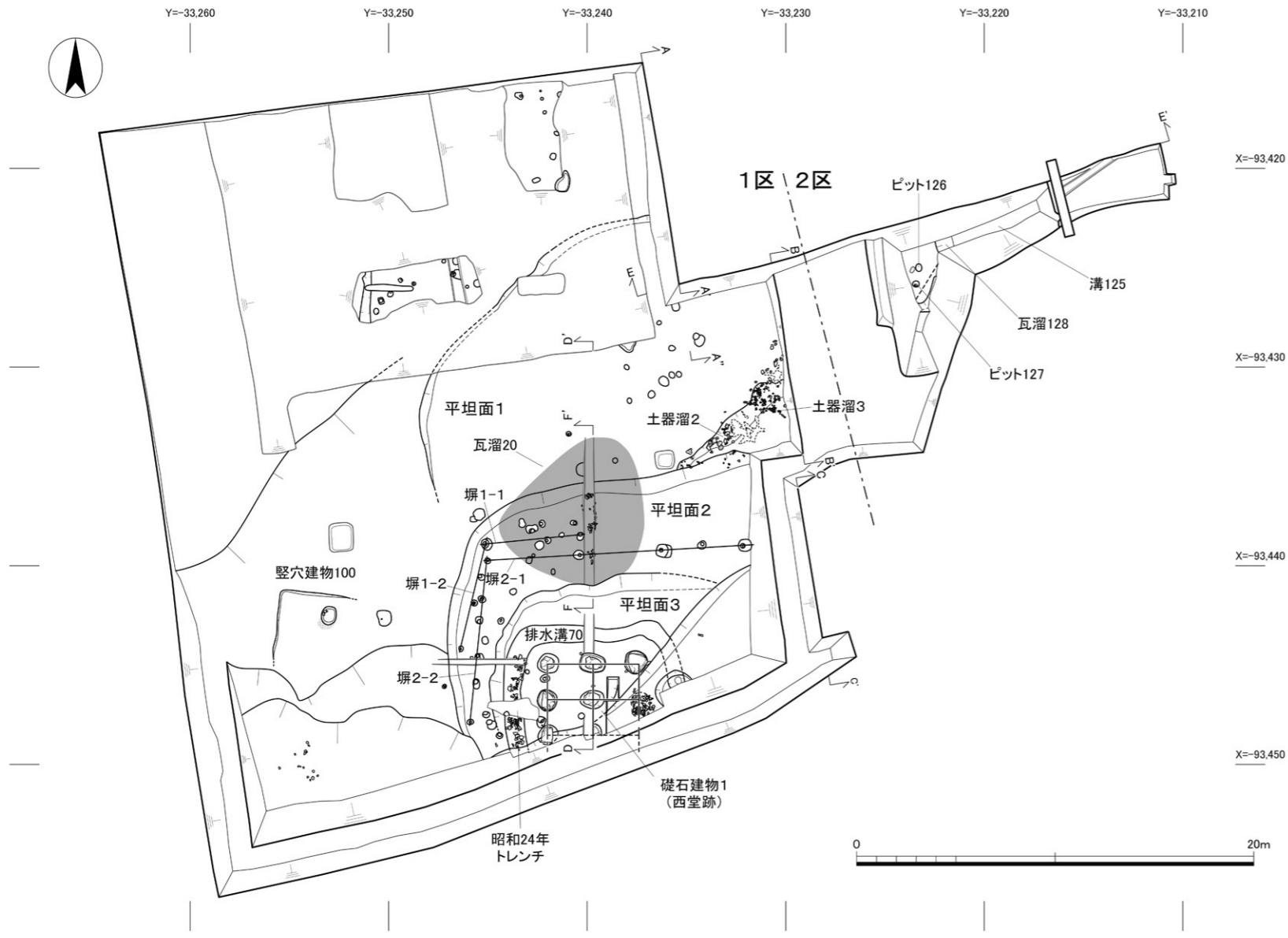


図4. 1区・2区平面実測図(1:300)



図6. 1区の礎石建物1、排水溝70、壩(北東から)



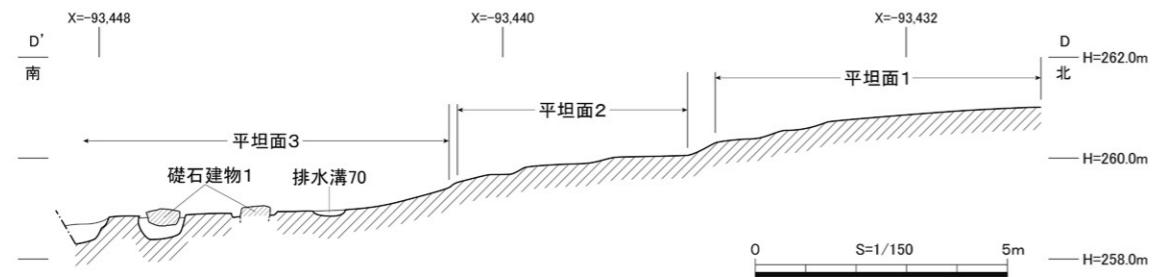
図7. 平坦面1・2と瓦溜り20(南東から)



図8. 竪穴建物100(北西から)



図9. 土器溜り2・3(北西から)



※D-D'断面位置は図4に対応

図5. 1区の縦断面図(1:150)

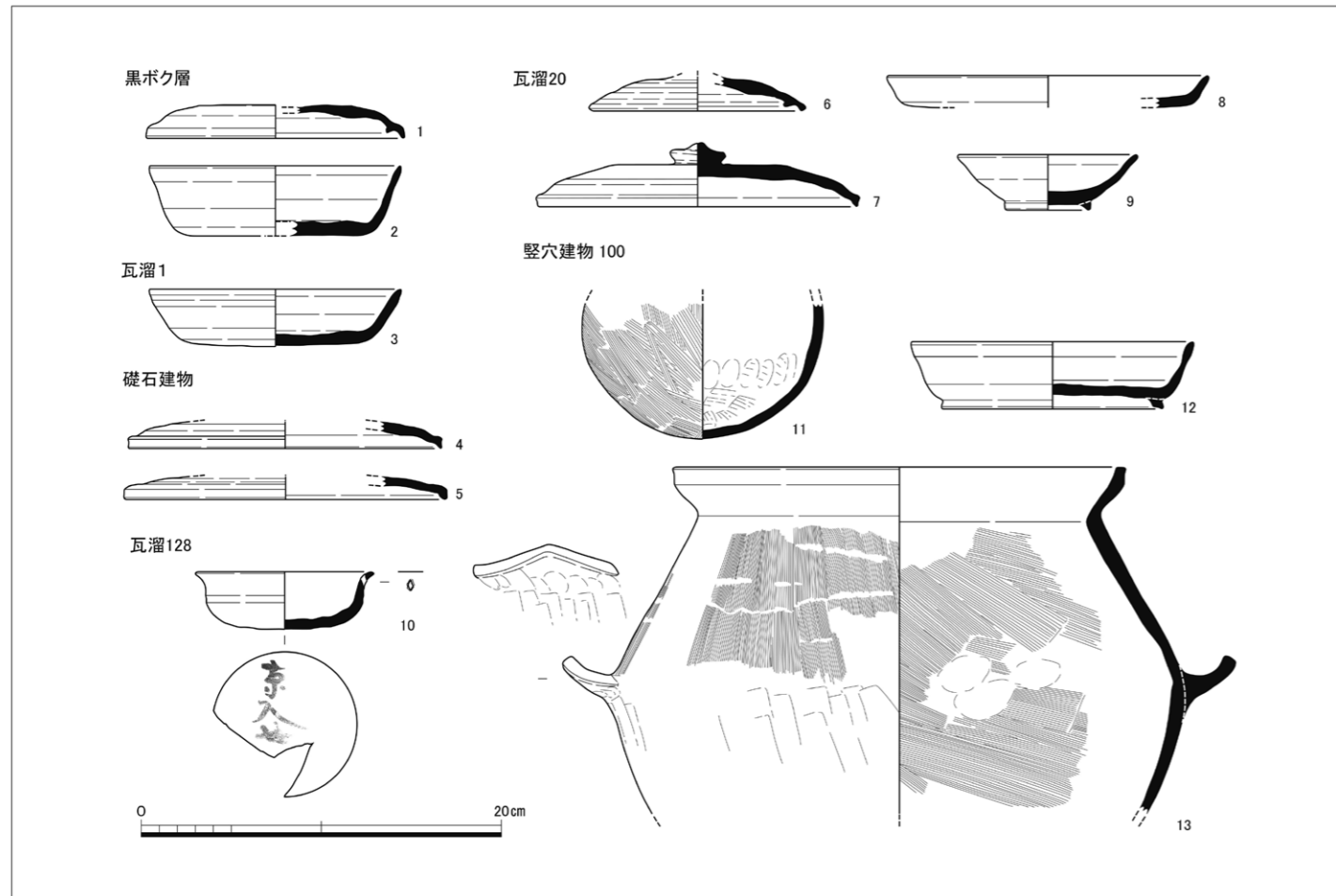


図10 周山廃寺出土土器類(1:4)

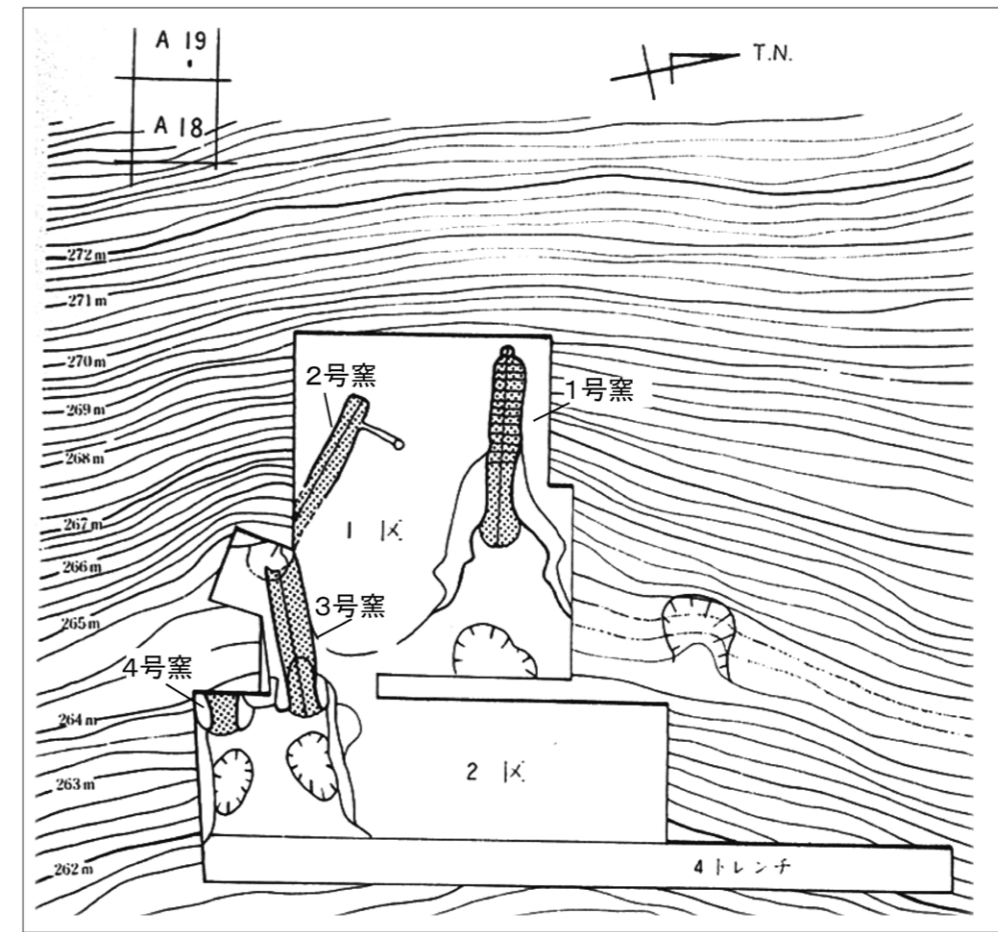


図12. 周山瓦窯跡平面図(京都大学文学部考古学研究室1982、S=1:200)

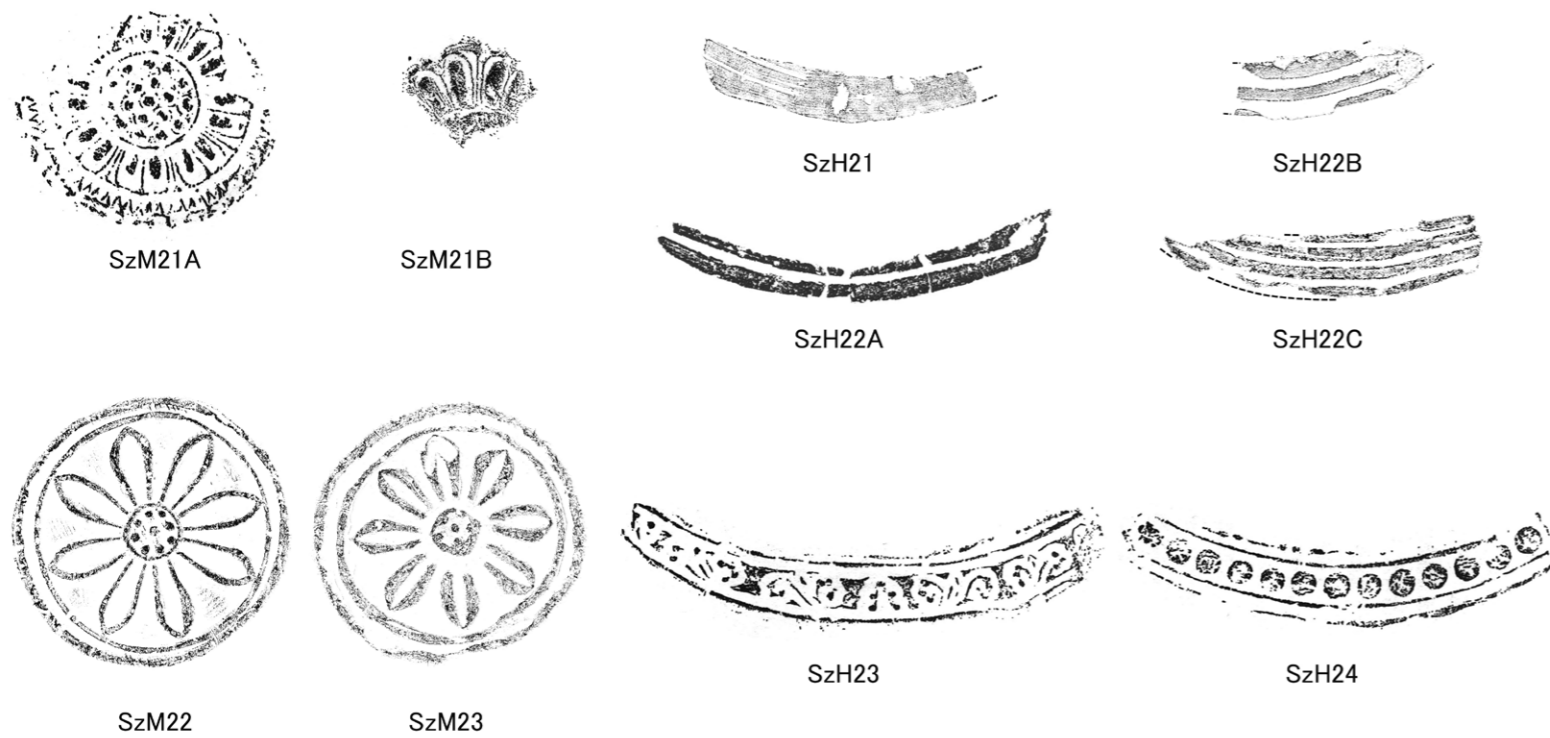


図11. 周山廃寺・周山瓦窯跡出土軒瓦型式一覧(S=1/5)

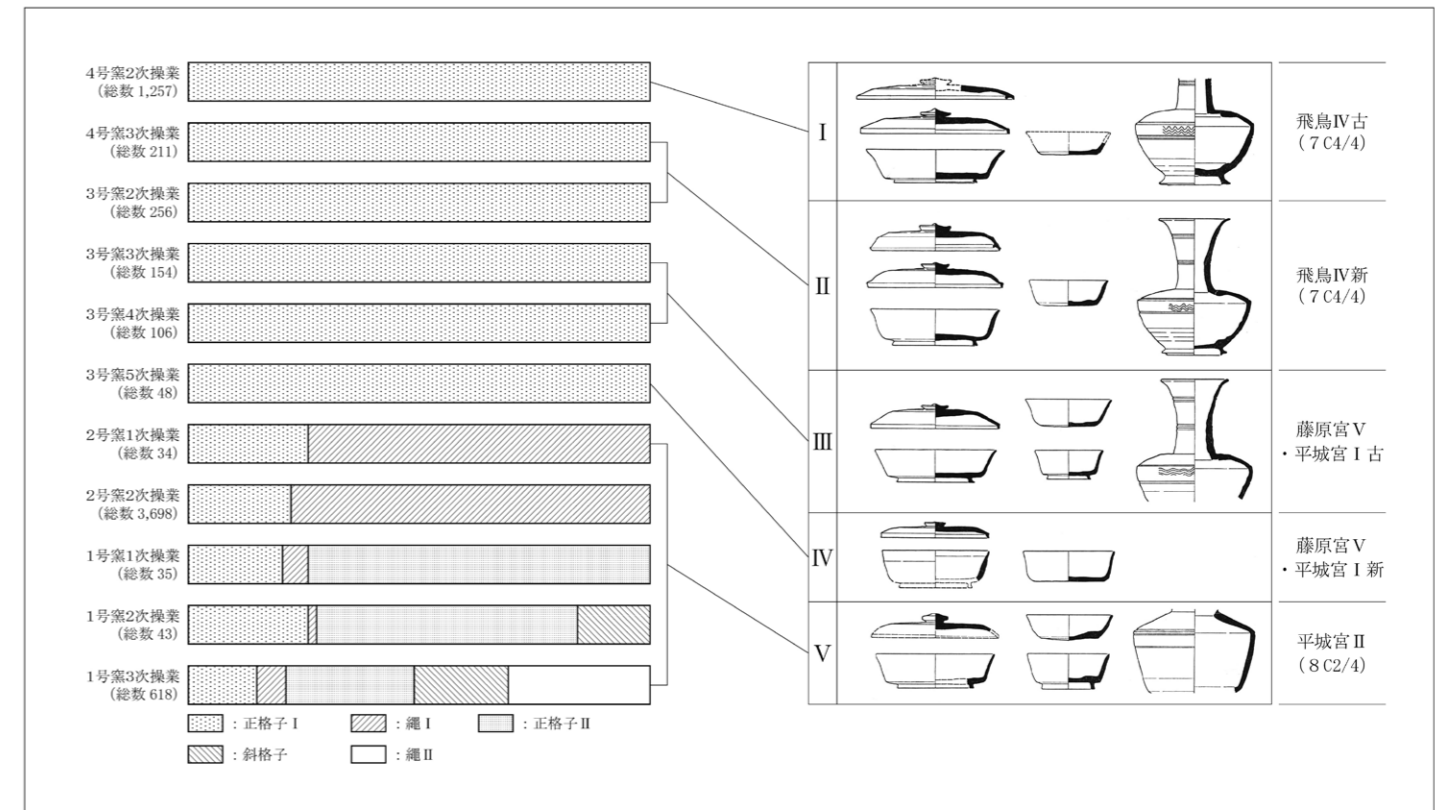


図13 周山瓦窯出土平瓦の型式別比率の推移と操業年代 (京都大学文学部考古学研究室 1982 より一部改変、縮尺不同)